

特集

水は限りある資源です！

有効に使いましょう！

水道のはなし

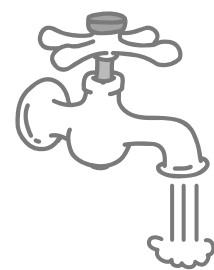
夏本番となり、水を使う機会が増えてくると、水のありがたさを感じます。

蛇口をひねると、当たり前のように水がでて、普段から何気なく使っている水道ですが、どのようにして寄居町の水道が造られたのか、水はどのように運ばれるのかなど、今月号では私たちににとって重要な水について特集します。

寄居町の水道のはじまり

寄居町の水道は昭和36年度から給水を開始し、来年度には50年を迎えるようとしています。

昭和36年度に完成した象ヶ鼻浄水場から市街地を中心とした給水が始まり、その後、折原浄水場や県水受水施設の寄居配水場と男衾配水場が建設されました。また、簡易水道事業として金尾浄水場と風布浄水場が建設され町内のほぼ全域に給水されるようになりました。



災害や事故に備えて

今では、蛇口をひねればいつでも安全安心な水が飲めるようになりましたが、水道が整備されるまでは井戸水や山の湧き水が使われていました。しかし、渇水期には水が足りずに困ることが多かったようです。

昭和35年の冬から春にかけて、長



水道が整備される前、長引く雨不足で市街地の井戸が枯れてしまったため、自衛隊による給水活動が行われました。（昭和35年3月28日発行寄居町広報より）

こんなことも
ありました
緊急時の給水対応
昔と今

引く雨不足のため市街地の600余りあった井戸のほとんどが枯れてしまい、もらい水に歩く人や荒川へ洗濯に行く人が増え、当時、町内に1軒だけあった公衆浴場も時間営業となり、電車を利用して小川町まで入浴に行くといった様子で、公衆衛生や消防の面から大変心配されました。そこで、町では県知事に自衛隊の派遣

断水の際は給水車で水を運びます。



今は町の給水車で、災害のときや事故で水道管が壊れた時の断水に備えています。

を要請して給水活動が行われました。50人の自衛隊員により、町内20カ所の給水場で1日80～100m³の給水が行われ、市街地1、500世帯約6、000人の人たちの炊事、飲料水をはじめ下着類の洗濯等に使われたとのことです。（昭和35年3月28日発行寄居町広報より）

このことは、私たちの生活と水がいかに密接な関係であるかを物語っている出来事ではなかったでしょうか。町では、老朽化した水道管（石綿セメント管）について、耐震管等への切り替え事業を進めています。水道工事の際には、通行規制や断水など、皆さんには大変ご迷惑をおかけしますがご理解とご協力をお願いします。また、平成21年度には災害や事故による断水時に水の供給を行うための地域の活性化・経済危機対策臨時交付金制度を活用し給水車を購入しました。

給水車とは、災害時や事故で水道管が壊れたときに、皆さんのもとへ水を運ぶことのできる車で、今回購入した給水車は1、800リットルのタンク容量があります。これは、一日に必要とされる3リットルの飲料水600人分に相当します。また、この給水車はポンプを搭載しており、低い場所の水を吸い上げたり、高い場所へ水を送ったりすることができます。

寄居町の水道は
来年で
50歳！

寄居町の水道は来年で50歳になります。

昭和36年にはとても大変な工事をして、水道が完成しました。ちよっと当時は振り返ってみましょう。



水道管の布設工事



常木配水池の建設工事



水道管の布設工事